

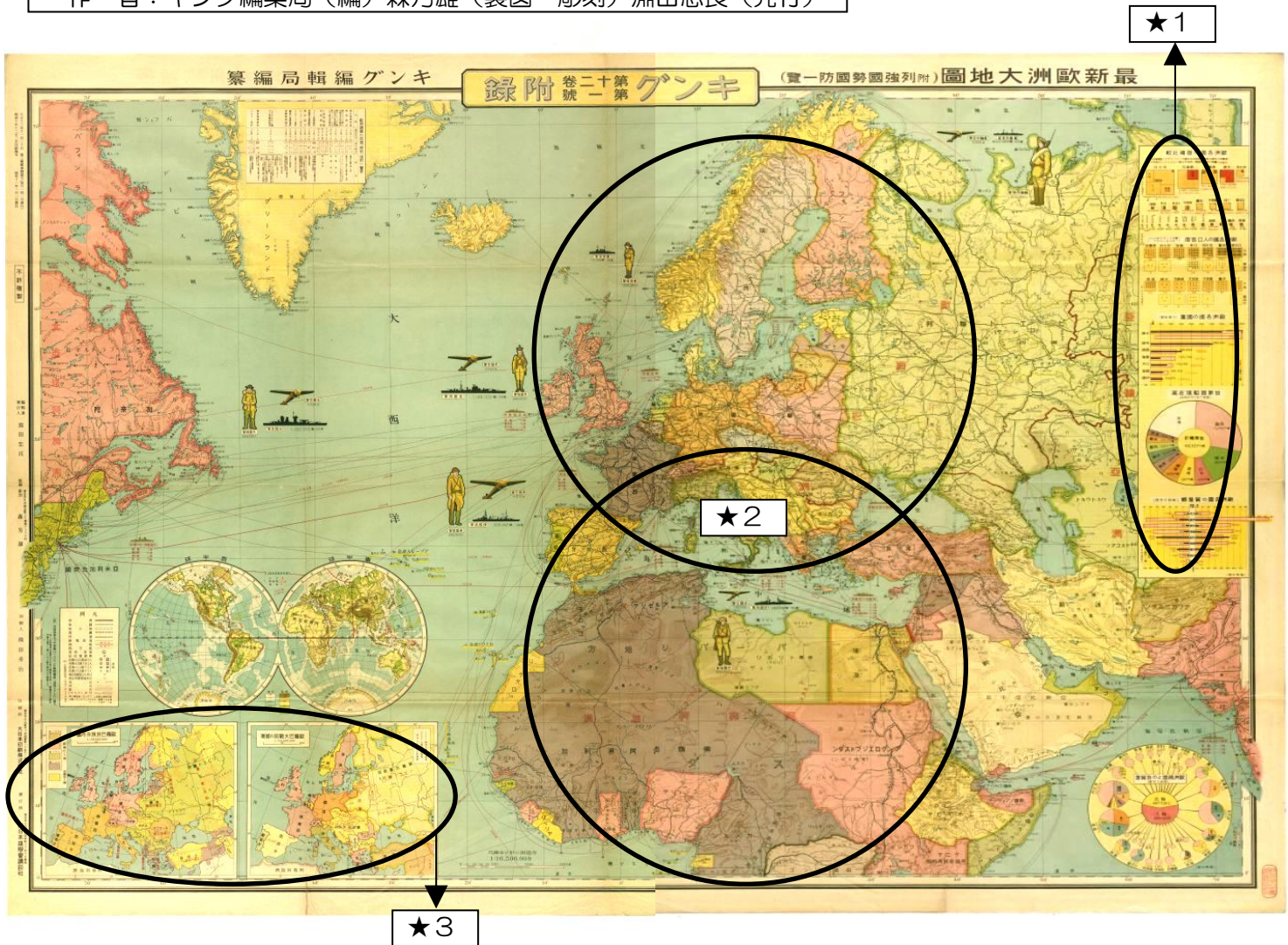
# 授業で使える当館所蔵地図

No. 27 『最新歐洲大地圖』

作成年：1935（昭和10）年

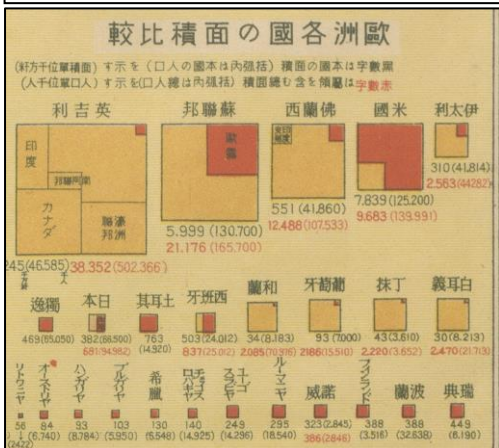
サイズ：76×107cm

作者：キング編集部（編）森芳雄（製図・彫刻）淵田忠良（発行）



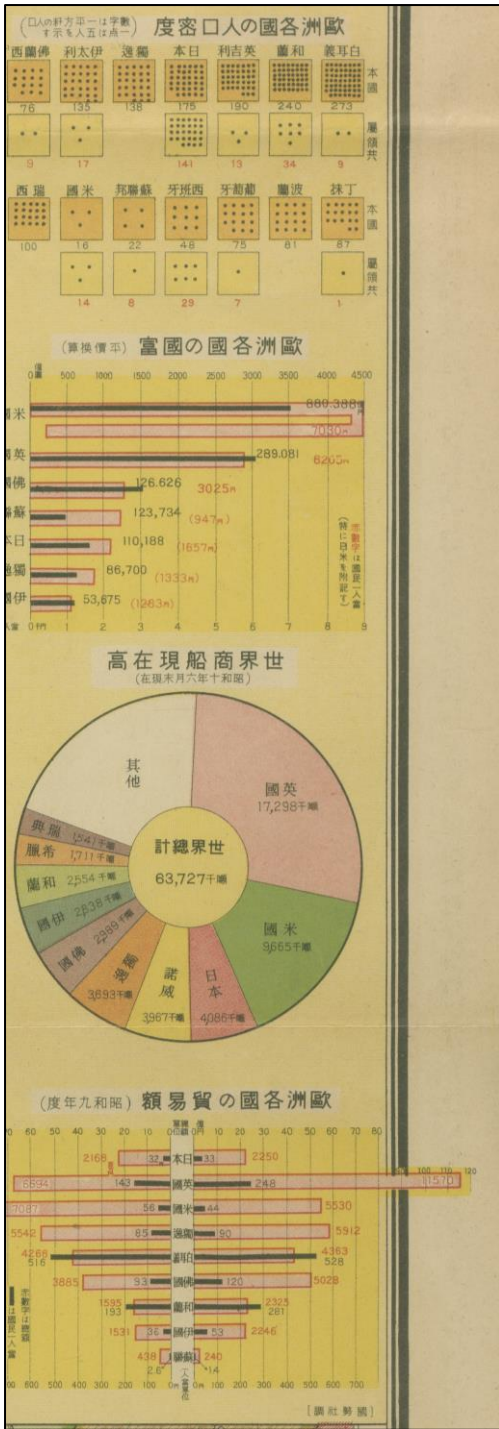
## 【解説】

第二次世界大戦開戦・太平洋戦争開戦直前のヨーロッパ各国とアメリカ合衆国、及び日本の国力を比較することが出来る統計資料の添付されたヨーロッパ地図である。地図からはヨーロッパ各国が、道路網と鉄道網により既に密接に連携していることが読み取れる。また統計地図からは、日本とアメリカを列記することで、当時の世界の牽引国はヨーロッパ各国（特にイギリス、フランス、ドイツ）と、アメリカ、日本であるということを読み取れるとともに、ヨーロッパ各国とアメリカと日本では、明らかに日本の国力が低いことも読み取れる。また、地図の左下には第一次世界前後のヨーロッパの国の変化も掲載されており、どのような変化があったのか、分かりやすい内容になっている。



★1 左の図は『最新歐洲大地圖』の該当部の拡大  
歐洲各国の面積比較

地図中の統計では、本国は赤色で、植民地は黄色で着色されている。面積の下に表記してある数字は人口を表している。当時の戦争は現代とは異なり、人口＝戦闘力で考えることができる。また植民地が多いということはそれだけ、資源を多く確保し、戦争継続能力が高いことを意味している。



### 歐洲各国の人口密度

人口密度は1 km<sup>2</sup>あたり、どれだけの人口があるかを示している。その国の面積が少なく、人口密度が高いということは、その国においては農業などの関係で人口稠密状態が必要なのか、もしくは都市化が進んでいるかのどちらかだと考えられる。今回の地図はヨーロッパであるために、都市化が進んでいると考えられる。

### 歐洲各国の國富

日本円に換算した金額で表示されている。通常、平価といった場合には、金本位制体制下における、金1オンス=35米ドルに対する各国資産の換算値になる。また、国全体の資産を国民数で割ったものが、国民一人富で表現されている。ただし、何年度のデータを用いているのか、記載されておらず、正確性においては問題があり、取り扱いを慎重に行う必要がある。しかし、第一次世界大戦後に、アメリカが世界最大の債権国になったこと、農業国から工業国に転身したことが読み取れる。

### 世界商船現在高

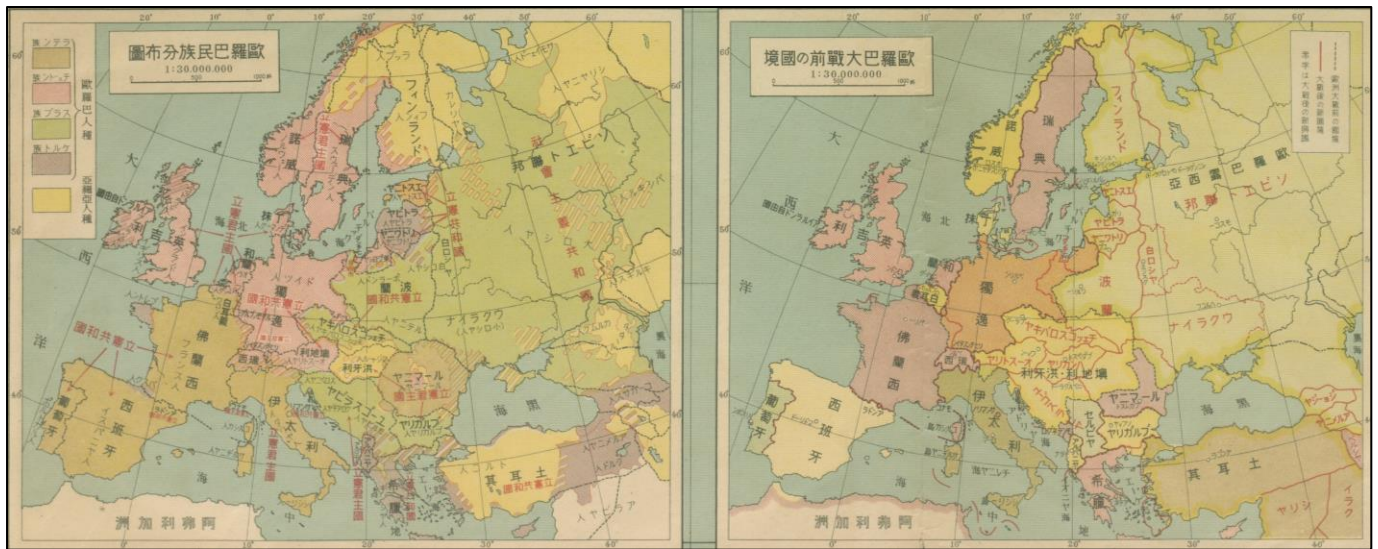
現在でも世界の国家間物流の中心は船舶である。しかし、当時は航空機や自動車は産業・文化の発展途上であり、船舶による物流が現在よりもさらに大きいウェイトを占める状態であった。また造船力は軍艦の排水量につながるため、海軍力に直結しているという点もある。

### 歐洲各国の貿易額

左右のどちらが輸入なのか、輸出なのか書いていないという致命的なエラーがある。しかも、1930年代は世界恐慌に各国が対応するために、ブロック経済を積極的に行っていた時代でもある。ブロック経済とは本国と植民地間の移出入を増加させ、第三国との貿易には高関税をかけ、自国の経済を保護する保護貿易の1つである。そのため、この統計では輸出入とされているが、これは第3国との輸出入だけを指すのか、植民地との間における移出入をも含めたものなのかが不明確である。しかし、いずれにしても、イギリスとアメリカの貿易（移出入？）額はたいへん大きく、日本とは隔絶の差があることを読み取ることが出来る。

## ★2 ヨーロッパとアフリカ大陸

ヨーロッパ各国は、アフリカ大陸の多くを植民地化していることが、アフリカ大陸の一部しか載っていない状態の本地図からも考察できる。また鉄道網や交通路の整備状況などから、本国が植民地から財を一方的に搾取る関係であることが考察できる。



★3 歐羅巴民族分布圖、歐羅巴大戰前の国境 上の図は『最新歐洲大地圖』の該当部の拡大

第一次世界大戦は、3つの帝国が減んだ戦いであるともいえる。同盟国側のドイツ帝国、オーストリア＝ハンガリー二重帝国、ロシア帝国である。帝国とはその字の通り、ある強大な国家が他の民族や国家を内包する形で成立している国家形態である。そのため、この3つの帝国が崩壊したことにより、多くの民族が民族自決の原理のもとに独立を目指した。これはレーニンの唱えた「平和に関する布告」や、またこれに対抗する形でアメリカのウィルソン大統領の提唱した「14カ条の平和原則」の第5条「植民地問題の公正解決」、第10条「オーストリア＝ハンガリー二重帝国の自治」、第11条「バルカン諸国の回復」、第12条「トルコ少数民族の保護」、第13条「ポーランドの独立」などでもヨーロッパにおける民族自決が述べられている。そのため、東ヨーロッパでは、左側の民族分布図における「〇〇人」に相對する形で右側では幾つもの新国家が出来ているのがわかる。またフィンランドやハンガリー、スカンディナ비아半島北部、ウラル山脈西部ではアジア系の人種が多いということが分かる点も興味深い地図となっている。

【利用の例】

○中学校歴史的分野、高等学校世界史A・Bで利用できる。

第一次世界大戦と第二次世界大戦の戦間期における経済分野の読み取りであったり、新しい国家の成立について考えさせたりする資料としての活用が考えられる。また、軍艦の隻数や兵力なども記されており、新たな戦争への秒読みの状態であったことも考察させたい。

○中学校地理的分野、高等学校地理A・Bで利用できる。

交通について学習する単位においては、船舶や航空機の航路が集中している場所はどこであるのか、また鉄道網が発達している場所はどこであるのか読み取りをする学習を通じて、交通路の発達と経済の発達と密接な関係があることを考えさせたい。また、アフリカ大陸ではほとんど鉄道網が発達しておらず、本国がどのような立場で植民地経営をしていたのか考察をさせることもできる。

人種・民族について学習する単位においては、現在のヨーロッパ地図と比較させることで、新たにできた国家、現在はない国家などを探し、どうしてそのようになったのか考察させる授業を展開できる。また、現在、アフリカにアフリカ系の住民が多い理由などもこの地図から考えることができる。

工業や国際関係について学習する単位においては、イタリアがリビアから原油を輸入する理由や、フランスがアルジェリアから原油を輸入する理由、またODAにおいてイタリアがリビアへより多く支援する理由や、フランスがアルジェリアをはじめとするアフリカの赤道以北の国々により多く支援をする理由も読み取ることができる。